

ジョアン・フィンケルシュタイン著

『ファッションの文化社会学』（成実弘至訳、せりか書房、1998年）

直江 道愛

日本ではこれまでファッションやモード、流行について語ることは軽薄なことであると見なされてきた。現に大学においても、被服学や家政学あるいは服飾史といった研究はなされてきているが、「ファッション学」や「モード学」といった研究は、なかなか評価されてこなかった。なぜなら、訳者のあとがきにもあるように、ファッションは「社会の広い範囲に見られる現象であり、その研究についての関心も領域も多岐にわたるため、なかなか明確な全体像を描けない」（211頁）という事情があるからだ。また、「一般に（また学問の世界でも）いかにも表面的で軽蔑すべきするものにたいして『ただのファッションでしかない』などと平気で口にしたり書いたりする人びとが後を絶たないからには、ファッションに対する社会的な偏見や抵抗感はまだまだ根強い」（211頁）のは確かである。しかしながらファッションやモードとは「狭い学問領域を越えて存在する広範囲な現象であり、同じテーマでも視点を変えれば何度でも議論されても不思議ではない」（207頁）ものなのである。本書の内容は、社会学、ジェンダー研究、哲学、経済学、歴史学、美術史、記号論、マーケティング論など様々な学問領域に渡っている。広義な意味も含めてファッションに興味を持つ人たちのみならず、ファッションにあまり関心のない人々に向けてのファッション研究入門書として取り上げるべき著作であると思われる。

本書は、現代社会におけるファッションの本質を、ゲオルク・ジンメル（Georg Simmel、独、1858 - 1918、社会学者、哲学者）、ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu、仏、1930 -、社会学者）、ロラン・バルト（Roland Barthe、仏、1915 - 80、作家、批評家）、ミシェル・フーコー（Michel Foucault、仏、1926 - 84、哲学者）、ジャン・ボードリヤール（Jean Baudrillard、仏、1929 -、社会学者、思想家）の理論を使い多角的に論じたものである。その構成は次の通り。

- 第1章「現代社会とファッション」
- 第2章「ファッション論の系譜」
- 第3章「衣服も意味を読むこと」
- 第4章「自己を作り上げる」
- 第5章「ジェンダー・セックス・ショッピング」
- 第6章「生活の美学と身体の抑圧」
- 第7章「メッセージとしてのドレス」
- 第8章「消費社会とモード」
- 第9章「反抗する都市のスタイル」

フィンケルシュタインが最初に注目するのが、ミシェル・フーコーである。フーコーの著書『監獄の誕生』（1977）における「身体論」が明らかにするように、衣服とは「個人と社会の両方に繋がっている」（31頁。以下引用はすべてフィンケルシュタイン著『ファッションの文化社会学』の頁数）ものであり、社会組織は、衣服を通して管理制度の支配力を身体へと及ぼしていったという。つまり言い換えれば、そのような衣服やファッションが包み込む人間のほかならぬ「身体」こそが「権力」の交差する場所なのである。

次にフィンケルシュタインがこの『ファッションの文化社会学』の中で分析するのは、「経済と階級から見た流行現象」（20頁）を論じたソーステイン・ヴェブレン（Thorstein Bunde Veblen, 1857 - 1929、経済学者）の『有閑階級の論理』（1899）である。経済合理主義者であったヴェブレンにとって、「美しさの最高の到達点は簡素で機能的であること」（20頁）であった。だからこそヴェブレンにとっては、「ファッションや新しい流行を追い求めることは無意味であり、そして無意味だからこそ魅力的なもの」（21頁）なのだ。さらにヴェブレンによれば、ファッションとは「社会の中でその人の地位を明らかにするシステム」（25頁）である。つまり新興ブルジョワ階級たちは「誇示的消費」をすることによって、豪華に着飾り、労働の臭いを消し、自分たちは働く必要がないことを示した。そうすることで自分たちと中・下層階級を区別した。それ故、ヴェブレンは「ファッションを現実の社会に存在する権力」（28頁）とみなすのだ。しかし同時に、ファッションは、「自分を変えたい人々の描いている想像上の自己イメージ」（28頁）を成立させることもできるし、「自分を表現したり競争の中で優位をアピールする心理的欲求」（28頁）に応える手段にもなるし、あるいはまた「地位、階級、性別など社会的な役割を演じる道具」（28頁）でもある。ジンメルもファッションを「文明化の過程をはかる尺度」（28頁）だと定義づけていた。フィンケルシュタインも言うように、ファッションは「自己の内面が映し出されるので、その進化によって、自己のイメージもますます複雑になっていく」ものなのである。そして、ファッションにおいては、「スタイルによってある社会集団への所属を公式に声明することになるが、スタイルを自分のほいままにすると、それによって、主体性に影響するファッションの力を凝視することができる。そのときファッションは個人主義という論理に役立つ。人々がどんな外見を選ぶか、自分が他人にどう見られたいかについて、成形された身体は、様々な社会的声明を主張する場所となる。身体を成形することによって、自己を成形する実践もまた可能となるのである」。（88頁）このように見てくると、衣服という人間の身体に最も密着した「道具」が果たす役割が社会においてどれほど重要であるかが理解できるであろう。

ヴェブレンの『有閑階級の論理』をさらに展開させたのがボードリヤールである。ボードリヤールは「ファッションは経済現象として始まり美意識となって終わる」（121頁）という。ボードリヤールは、ファッションが階層化を象徴的に回復する方法だとみなすこれまでの議論から大きく離れる。ボードリヤールによれば、「現代社会ではすべての人々が社会に利益をもたらすための消費者となるように強いられている」（131 - 32頁）という。そして「現代社会は文化資本（注参照）的に無秩序な世界である。この世界では記号とイメージが氾濫し、ごた

まぜとアイロニーをつくり出し、人びとは決まった意味のない不安定な状態に置き去りにされている」という。「たがいを区別する記号として使われる多様なスタイルとブランドのファッション商品と、一時的な秩序や安定をもたらす象徴の体系はこの混沌とした社会を維持する」のである。なぜなら、ボードリヤールは人々は自分の欲求を特定できないと考えているからである。つまり、具体的に何を欲しているのかわからないというのである。しかし、人間の欲求は「差異」と「社会的な意味付け」(161頁)を欲している。つまり、消費を快樂として捉えるのではなく、コミュニケーションと象徴交換の構造として考えると、消費は他者と共に行動することができるものになるという。こうして、消費は「社会の絆」(168頁)となるのだ。

このようなさまざまな論者の思想に検討を加えながら、フィンケルシュタインは次のように述べる。われわれは、「ファッションによって知的レベルさえもはかれることになる。社会は変化によって進歩し、ファッションは変化のひとつの形式であり、そしておしゃれな人は絶えず自己を知的に考察しているのだ。だから論理的にファッションには、個人の変化への適応力や許容量が反映されるだけでなく、社会の文明化のレベルと進歩への感受性も表現されるのだ。…ファッションは過去と未来の分断線上にあって、現在という瞬間にのみ存在する…このようにファッションを見れば、文明の理想に向かってどれだけ進歩が達成されたかを知ることが出来る…いまやファッションは、人をあざむく手段となったのだ。それは人びとを固定的な社会的秩序におくかわりに、社会の中で様々な存在になりたいという欲求を表現してくれるのだ。」(71 - 73頁)

われわれは、身体を文明化するために様々な「道具」を使い社会と関わってきた。その最も人間の身体に密接した「道具」である「衣服」を使うことによって、「自己」との関係、あるいは「社会」との関係を「消費」してきたのである。このような消費社会は、おそらくこれからも続くであろうし、「ファッション」や「モード」という社会現象も消滅することなく続くであろう。ファッションやモードを研究することは、とりもなおさず「身体」を研究することなのであり、それはまた人間の営為を考える新たな契機であるとも思われる。

ありきたりの言葉ではあるが、古きを知ることは新しきを知ることである。本書の主張の意味を考えると、ジンメルも言うように、ファッションの社会的意味を問い直すことは、大げさではあるが、ある意味で人間の文明史を見る事なのかもしれない。本書は文明の黙示録となるべく、21世紀における、新たな身体感覚を予感させる多くの示唆を含んでいるのだと言える。

注)

文化資本 (capital culturel) とは、『新社会学辞典』(有斐閣、1993)によれば次の通りである。

「ブルデューの用語。個人が所有する文化的「資産」を意味する。社会・経済現象ばかりか、文化的なもの、象徴的なものを、生産・蓄積・投資といった経済的な用語を用いて総合的に説明してみせるブルデューは、この文化資本によって文化的再生産、ひいては社会構造そのものの再生産のメカニズムを明らかにしようとした。文化資本は、身体化された様態、客体化された様態、制度化された様態という三つの形式をとる。身体化された文化資本の様態とは、持続的に身体を使用することによって無意識的に獲得され蓄積された、ものの言い方、感じ方、振

る舞い方といった、身体化されたハピトゥス（日常的実践）のことである。また客体化された様態とは、絵画、書物、辞典、道具、機械といった具体的な形式をもって現れた資産をさし、制度化された様態とは学歴・資格などを意味する。文化資本の獲得、蓄積、継承のためには、経済資本の維持が重要な前提となっており、この点で文化資本の分配構造は経済資本の分配構造と密接な関係をもっている。」（1293頁）